

高等学校 外国語(英語科) 学習指導案

指導者 景山 雄斗

日 時 令和5年11月14日(火) 第5限 13:20～14:10
場 所 HR 教室 (1年C組)
学年・組 中学校1年C組 (42人)
単 元 Unit 7 New Year Holidays in Japan (*Here We Go! ENGLISH COURSE1*, 光村図書)
目 標 日本の文化を知らない読み手に興味を持ってもらうために、お節料理について調べたことを、まとまりのある文章を書いて伝えることができる。

指導計画 (5時間)

第一次 Part1～4 の内容理解 4時間
第二次 まとまりのある文章を書く 1時間 (本時)

授業について

平成29年告示の中学校学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。このうち深い学びを実現させるための英語科固有の見方・考え方とは、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者とのかわりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」である。すなわち、具体的な目的や場面・状況等の設定が他者の存在を決定づけ、それによって情報の選択や表現の仕方が変わると考えられる。

本授業では、日本文化であるお節料理について調べたことを基に文章を書くことを最終活動として設定し、そのプロダクトの活用可能性を生徒自身に考えさせる。目的・場面・状況を具体的に考えさせ、実生活で使われている場面を想像させることで、読み手への意識を与えるとともに主体的な学びの実現を目指す。また、オンライン掲示板サイト Padlet を活用し、一文ずつ書いた英文を paragraph となるようにサイト上で並び替える活動を行う。即時共有された自由産出英文をグループやクラスで推敲しあうことを通して、対話的で深い学びの実現を目指す。

題 目 Padlet を活用した書くことの指導

本時の目標

1. 代名詞 it の特徴やきまりを理解できる。(知識)
2. 自分が興味のあるお節料理について調べたことを、簡単な語句や文を用いて書いて伝えることができる。(技能)
3. 日本の文化を知らない読み手に興味を持ってもらうために、日常的な話題 (お節料理) に関して調べたことを、まとまりのある文章を書いて伝えることができる。(思・判・表)

本時の評価規準 (観点/方法)

1. 代名詞 it が指す先行詞を理解できている。(知/定期試験)
2. 自分が興味のあるお節料理について調べたことを、簡単な語句や文を用いて書いて伝える技能を身に付けている。(技/Padlet 上の文章)
3. 日本の文化を知らない読み手に興味を持ってもらうために、日常的な話題 (お節料理) に関して調べたことを、まとまりのある文章を書いて伝えている。(思/Padlet 上の文章)

本時の学習指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点
【導入】	○自分の好きな日本食について英語で話す。	日常的な話題から生徒の関心を広げる。
【展開①】 ○外国の料理をペアの相手に英語で書いて伝える。	○外国の料理について、ペアの相手に 3 文の英語で書いて説明する。	○読み手によりよく伝わる情報構造について考えさせる。
【展開②】 ○日本料理であるお節を外国人に英語で書いて伝える文章を書く。	○プロダクトがどういう場面で役立つか考える。 ○文と文の順序や相互の関連について考える。 ○調べた情報を 1 文ずつ Padlet 上に書き込む。 ○グループで相談しながら、まとまりのある paragraph になるように文を並び替える。 ○他のグループの説明文を読み、よりよい文章になるようにアドバイスし合う。	○目的・場面・状況を生徒自身に考えさせる。 ◆自分が興味のあるお節料理について調べたことを、簡単な語句や文を用いて書いて伝える技能を身に付けている。(技/Padlet 上の文章) ◆日本の文化を知らない読み手に興味を持ってもらうために、日常的话题（お節料理）に関して調べたことを、まとまりのある文章を書いて伝えている。(思/Padlet 上の文章)
【まとめ】 ○本時のまとめ	○まとまりのある文章にするために必要なことを考える。	○it が指す先行詞によって文の順序を変える必要があることを気づかせる。

実践上の留意点

1. 授業説明

本実践は、独立した一文ずつの英文を、オンライン掲示板サイト Padlet 上で並び替えてまとまりのある文章にするという活動を行った。これまでの授業の中で一文単位の英語を自由に産出するという活動を行ってきたが、複数の文から成る文章の作成に当たっては文と文との相互のつながりを理解していない生徒の様子が見受けられたからである。

第一次では教科書の内容理解を行った。日本文化がテーマである本単元を通して7回出てくる代名詞 it は、先行する名詞（句）を受けるものと先行する文全体を受けるものという別々の働きで用いられている。it の指す内容を探す活動を通して、文と文との言語的なつながりに着目させ、代名詞のもつ働きに気付かせるように促した。また、帯活動ではペアの相手にお題の単語を英語で書いて説明する”Write and Explain in English Game”を行った。1人につき3枚ずつ配られたカードそれぞれに1文ずつ英語を書いたのちに、並び替えてペアに見せて当ててもらおうというものである。この活動を通して、文と文との相互の関係や抽象から具体の情報構造に注意しながらまとまりのある文章を書かせることを行った。

本時では、日本文化を知らない読み手に興味を持ってもらうために、お節料理に関して調べたことをまとまりのある文章を書いて伝える活動を行った。作成したプロダクトが実生活でどのように役立つのかを考えさせ、目的・場面・状況を生徒自身で設定するように促した。そして、グループで調べた情報を1文ずつ Padlet に投稿し、それをまとまりのある文章になるように並び替えさせた。その後、それぞれのグループが作った文章を閲覧し、文法の誤りや情報の順序について指摘しあう活動を行った。生徒が作成したお節の英語版メニューを見てみると、「お節の名前」⇒「名前の由来」⇒「そこに込められた思い」というように情報構造に注意したり、「アメリカでは〇〇と言うが日本語では〇〇と言う」のように、読み手を意識したりしながら書いていた。

2. 研究協議

研究協議では、主に二点の指摘があった。

一点目は、目的・場面・状況をより具体的に引き出すような発問をすることである。英語版メニューを見る読み手の視点から、どんな情報を知りたいかを考える活動があると、より「日本文化を知らない読み手に興味を持ってもらえるような内容の選択」ができるようになるのではないかという指摘である。

二点目は、インターネット環境の扱い方についてである。オンライン環境下では生徒が自由に翻訳サイト等を使えるため、調べたことをそのまま翻訳にかけ、投稿している生徒の姿も見受けられた。インターネットで調べたことをメモに取るオフラインの時間をとることや、自分が投稿した情報に責任を持つように指示することが必要だったのではないかという指摘があった。

本実践は、「日本文化を知らない読み手に興味を持ってもらえるような内容を選択できるようにすること」「読み手が理解しやすいように、文と文の相互の関係や抽象から具体の情報構造に注意しながらまとまりのある文章を書くこと」（書くこと イ）を重点的な目標とし、思考力、判断力、表現力等の育成を目指した。

今回は、オンライン掲示板サイト Padlet の活用可能性を探るべく授業を実践した。Padlet を利用することで即時に情報が共有されるおかげで、他のグループのアイデアを参考にしながら書いている生徒の姿が見受けられた。その反面、一度に処理しなければならない情報が多くなり、混乱している生徒もいた。デジタルとアナログの両立を目指すために、それぞれの強みを生かした授業展開について考えていきたい。